

You may hesitate to give the sole agency for all India to strangers, but I suppose you can give it for a certain district e. f. Bombay Presidency; but it must be given at least for two years as trial.

There are so many things in your line which India wants, but many Japanese firms do not like to give sole agency and try to deal directly with buyers which is the great mistake and this way of business is one of the chief reason which has led the disgraceful reputation on Japanese goods. If exporters in Japan send their goods to individual firms in India, without through sole agent, it may seem well paying at the beginning because they are dealing with bottom. Soon after, however, competition occurs among the buyers (as there is no union here) they underselling each other and try to buy as cheap as possible considering little of the change of quality which naturally follows when they beat down the price badly; hence no profit into their hands and bad reputation on Japanese goods and exporters.

In addition to this there are some more disadvantages in having direct business connection with Indian Consumers.

The time of correspondence by mail between the two countries is so long during which business condition may change a great deal. Many things must be corresponded by cablegram which is not at all cheap in its rate.

In case one corresponds individually, therefore, the cablegram expence will amount terribly high while through one person he can save good deal.

Moreover, as you may aware, there are lots of tricky fellows in this market who are always eager to find out some trouble in order to cut down the price of good when the goods arrives. Dishonouring drafts is the most common case, those people are ever ready to do so; and making reason one way or other they try to cut down the price—they are really clever in making mole hills into mountains. Unless you have a proper agent, clever and trust worthy, you can not avoid a great loss.

Many Japanese merchants are here in hotels spending good amount daily. These people are now staying here for nothing but disolving troubles caused through the direct transactions.

"Business through agents" may not be so important in the trade with other countries but essential in India.

Have an able agent,—SOLE AGENT in each district, else it will be awfully difficult to rule the market even in such a favourable time as this.

I remain dear Mr. Fenner,

Very sincerely yours

K. Matsukura.

記  
念  
論  
文

## 記念論文

編者曰く、此に收載せるは故松倉乾二追悼會席上に於ける演説及び故人の遺稿出版に對して記念の爲めに寄稿せられたる論文中、特に印度經濟事情に關係あるものを掲げたる次第なり、

### 印度の現況に就きて

故松倉乾二追悼會に於て

前カルカッタ總領事 信 夫 淳 平 君

立後れまして、前後致しました失禮は、謹んで御詫び申し上げます、花岡さんの御懇命と、且は亡友松倉君と既往一箇年近く印度に在りて任地を共にし、諸般の研究を共に致しましたる御縁に因みまして、一言申上げるに過ぎないのであります。

亡友の松倉君には、種々の點に於て、私は敬服致して居りました、長所を澤山

有せられたのは、眞に敬服でありましたが、其の中の一ツは、先刻花園さんのお話のありました如く、印度の種々な事項に就て、研究調査せらるゝ其の熱心の御深いことである、私も日印の諸般の關係に就きましては、出来るだけの研究調査を心掛けて居つたのであります、併ながら愈々究めて愈々分らぬのは印度であります、海外各地の事情を大分研究は致して見ましたが、其のむづかしいこと印度に如く所は無いと申したい、兎も角も印度は大國であります、ザツと日本の十倍であります、日本の本土、朝鮮、滿洲租借地、臺灣一帯の領土を加へまして、ザツと日本の八倍半から九倍と云ふ所であり、人間の頭數を申すと三億千五百萬と稱する、支那は四億萬と言ひますが、支那の四億萬は堯舜以來の四億萬であります、昔より變りが無い四億萬であります、恐らく今後千年二千年経ちましても、矢張り四億萬の人口と稱するのであります、印度は兎に角十年に一回づゝ稍々精密な人口調査がありまして、それに基いて三億千五百萬といふ略々間違ひない數を示して居るのであります、氣候の如き極めて暑いと稱する、勿論印度は決して涼しい

愈々究めて愈々分らぬ印度

寒暖計は百十五度乃至二十度を示す

所でありませぬ併ながら暑いと申しましても、其の暑さたるや非常な差等がある、カルカッタの如きは、最も暑いのが今頃であります、四月末から五月と云ふ時が一番暑い、日蔭に於て昨今は百五度から六度であります、最も甚しい時は百十度に達することがあります、此の際に於きましては、空氣の乾き方が非常なもので、一例を申しますと、硯で墨を磨つて、筆へ付けて物を書かうとして紙へ持つて來る間に、筆の尖がカラ／＼になつてしまふ、インキなどは、一瓶が二日と有りませぬ、以て其の一班を推すべきである、然るに印度全體を通じて觀ると、尙其の上がある、モツと暑い所になると北の方にシンドと云ふ所がある、此の邊は昨今百十五度から二十度の間にある、丁度昨年でございます、英吉利からの新渡來兵二百名ばかり、カラチと云ふ所から、其のシンドを通過して田舎へ輸送せらるゝ途中汽車の中で卒倒したる者が殆ど百二十名、應急手當を加へてもどうしても甦らない即死者が三十何名、多少は防暑の設備に缺けて居つた關係もありませうが、兎も角も驚くべき暑さである、雨量の如きは此のシンドあたりは極めて少なく、一年に僅

か二時に過ぎぬ、蓋し世界で有數な雨量の少ない所である、然るにカルカッタの北方に、チエルラブンジと云ふ所があります、其所はシンドに反して世界第一の雨量の多い所である、一年に四百時から五百時、甚しい時には、一日に四十時から降ります、大雨盆を覆すと云ふやうな猛烈な雨も、大概一吋半から二吋位に過ぎぬものであります、それが一日に四十時から五十時降るのであるから、却々盆を覆す所の騒ぎではない、日本で信州の長野、備前の岡山あたりは、一年の雨量が四十時内外である、さうして見ると印度のチエルラブンジに於ては、我長野岡山あたりの一年の雨量を、一日で降つてしまふのであります、即ち雨量の多いことに至つては世界第一であります、さう云ふ所が在るかと思ふと、只今申上げたるシンドと云ふ所の雨量は、一年中に僅か一時半か二時しか無い、薬にしたくも無いと云ふやうな譯で、極端と極端を具へて居りませぬ、カルカッタの如きは、先刻申上げる百七八度と云ふ暑さの所でありませぬ、其の百何度と云ふ暑い所からして、例へばダーデリングと云ふ所に行く、汽車で二十時間である、カルカッタを夕方出まして翌

長野岡山等に於ける一年分の雨が印度にては一日に降る

朝ダーデリングに着きますと、温度が四十度から五十度である、五六月頃に火鉢を抱へて、慄へ上つて居ると云ふ所であります。

氣候風土が、此の如く極端と極端を具へて居ると同様に、人情風俗に至つても亦其の通りであります、印度人の人情風俗を支配する第一の要素は、宗教である、印度の宗教は、大多數はヒンヅーであります、全體の人口の十分の七は、ヒンヅー教徒である、其の餘の三割の中、二割まではマホメダンであります、其の残りの十分の一の中に、佛教徒もあれば、基督教もあり、ジャンと云ふ宗派もあります、其の大多數のヒンヅー教徒の中には、一體に道德の高い者がある、必しも宗教的信仰に由るのみでなく、今少し込入つた原因があるでありますが、要するに道德の高いことは種々の點に於て現はれて居る、獨りヒンヅーに限らず、マホメダンでも豫想外の所がある。

宗教の次に彼等の日常の動作を支配するものは、例のカストであります、是が頗る厄介なものであります、カストと云ふのは、詰り社會上の一の閥で、極めて矢筈しい分業制度を作り、截然として相侵さない、其の煩さいことは夥

人情風俗も亦多種多様

しい、チヨツと考へますると、世の中が段々進むに随つてカストなど云ふものは、無くならんければならぬやうに思はれますが、印度に於ては、カストの制を辯護する學者もあるカストあるが故に印度の文明が發達したのであると云ふ有力の議論もある、議論の當否は別として、事實に於てカストは却々衰へさうもない、要するに印度は、種々の點に於きまして、極めて研究のむづかしい且面白い所であります。

松倉さんが、是に着眼されて御研究になつたと云ふことは、敬慕に堪へませぬ、有望の人で前途春秋に富まれしに、一朝御他界になつたと云ふことは、獨り松倉君及御一族の方々の御不幸であるのみならず、日印の前途は益々松倉君の如き人材を要する此の際に方つて、國家の爲めに痛歎に堪へぬのであります、唯將來我々が、君の志を繼いで、日印に關する研究を重ね、生前に有せられたお志を全うするやうに力を盡し、君の遺靈を慰めたいと考へます、甚だ失禮でございますが之を以て御挨拶と致します。

## 對印交通貿易の狀況

管船局長 若宮貞夫 君

本邦對外貿易の消長は、航運機關の發達如何に基くこと固より云ふ迄もなきことにして、近時我邦の印度に對する貿易の顯著なる進歩を見たるは、畢竟本邦印度間航運の發達したるに因らざんばならず、而して本邦の對印度定期航路は、實に明治二十六年十一月、日本郵船會社が孟買に至る航路の施設を爲したるに始まる。

當時本邦に於ける海運業は、未だ幼稚なる域を脱せず、僅に内地沿岸及東洋近海の航路を有するのみに止まり、歐洲南北米、濠洲、印度、南洋等、所謂遠洋方面に至る本邦の定期航路なく、主として外國船に頼りて、此等地方との間に、旅客の交通物資の利通を爲せるに過ぎずして、我對外貿易の大部分は、外國船に依りて之を維持せざるべからざるが如き状態に在りしを以て、郵船會

印度定期航路  
の開始

棉花輸送の契約

社に於ては、廣く對外航路の施設に付調査の歩を進むると同時に、印度方面に至る航路開始の必要をも認め、既に之が計畫中なりしが、前記の如く遂に之を實行するに至りし直接の動機は、大日本綿糸紡績同業組合との間に、棉花輸送に關する契約の締結せられたることにあり、元來本邦に於ける紡績業者は、其の原料たる棉花を印度の市場に需め、而して之が運送は外國船に頼らざるべからざりしを以て、自ら高率なる運賃を支拂ひ、結局需要者及供給者共に尠からず不利を蒙り、延て我綿糸紡績業の發達を阻碍すること鮮少ならざりしが故に、同社は營業者の希望を容れて本航路を開始し、之に依りて本邦紡績業者との契約に基く棉花の輸送を行ふに至れり、然るに當時既に英國彼阿汽船會社、埃國、ロキド、及伊國、ルバチ、汽船會社等の諸外國汽船業者の本航路を經營せるあり、勢ひ此等外國船との間に激烈なる競争を惹起することを免れざりしが、明治二十八年七月に至り、此等各會社間に運賃率の協定漸く成りて、連年の確執を解くに至れるが、同社の本航路經營尙未だ困難にして、而も其必要極めて緊切なるものありしが故に、政府は明治

諸外國汽船と激烈なる競争

大阪商船亦孟買航路を開く

カルカッタ航路の開始

二十九年八月以降、本航路に對して補助を與ふることゝしたるが、爾來約十年の間に、其航運の發達顯著なるものありしを以て、明治三十九年四月以後、本航路の補助を廢し、自由航路として引續之を經營したり、其後大正二年一月、大阪商船會社に於ても、亦新に孟買に至る航路を開き、郵船會社及外國の諸社と相伍して、同航路の經營に従事するに至れり、此くの如くにして、本邦船に依る對印交通路は、比較的早く已に設けられたりと雖、孟買は印度の西部に偏在し、此の航路のみにては同國中央部との貿易に資するに未だ充分なりとせず、從て政府に於ては、更に、カルカッタ方面に對する定期航路を開くの必要を認め、營業者の注意を促す所ありしが、日本郵船會社に於ては、我航權の擴張を期し、日印貿易の發展に資する目的を以て、明治四十四年九月、カルカッタに至る航路を開始するに至れり、是より先本航路に於ては、英印汽船會社、印度支那汽船航業會社、及「アブーカ」ライの諸線已に相當の航路を張れるあり、之と競争すること不利なるを以て、相互提携して進まんことを提議したるも、交渉遂に成らずして、爲に此等外

## 日本郵船の奮闘

國諸線との間に激烈なる競争を惹起し、英印汽船會社は、アブーカール、ライン、を買收し、印度支那汽船航業會社と共に、各其施設を擴張し、郵船會社亦其船型を大にし、艘數を増加し、互に戰備を整へて相争ひ、三社同一航路に角逐して相下らざりし結果、本航路に於ける運賃は著しく低落し、各社孰れも尠からず損失を蒙るに至りしが、郵船會社は能く其競争に耐へ、本邦海運業の威力を中外に宣揚し、且我對印度貿易に關して多大の刺戟を與へたり。

此くの如くにして、孟買及、カルカッタに至る定期航路の施設成り、漸次其交通の整備すると共に、日印貿易は次第に發達し、本邦よりは綿製品、燐寸、板材、銅、樟腦、陶磁器、硝子製品、其他各種の雜貨多く輸出せられ、印度よりは、菜種粕、シエラックス、麻袋、鉄鐵等を輸入し、殊に印度産棉花は、本邦に於ける紡績業の原料として缺くべからざるものにして、本航路に於ける載貨中、最重要なる地位を占め、從て郵商兩社に在ても、之が積取に付本邦紡績業者との間に約定を結び、以て該品輸送上の便宜と利益とを計れり。

然るに歐洲戰亂の勃發は、世界に於ける物資需給の關係を激變せしめ、獨逸、

## 日印貿易の發展

## 歐洲戰亂と日印貿易の盛況

品其他從來歐洲方面より印度に輸入したる物資の缺乏を告げたるが爲、其供給を本邦に仰ぐに至り、自ら本邦よりの輸出著しく促進せられたるが、一方本航路に於ける外國船中、埃國「ロキド」は開戦と同時に撤退し、英國の諸線亦本國政府に依り徵用せられたる船舶ある等の爲、戦前に於ける航海度數を維持すること能はずして、船腹一般に不足を告げ、本邦當業者の困難少からざるものあり、郵商兩社に於ても、此狀勢に鑑み、開戦以來屢臨時船を差立て、本邦出貨の急に應じたるのみならず、時局の影響に依りて、不定期船の活躍するに伴ひ、印度方面に就航する船舶漸く多く、日印貿易は實に未曾有の盛況を呈するに至れり、今大藏省編纂の外國貿易年表に依り、開戦前後に於ける英領印度との貿易額を見るに、大正二年に於て、輸出二千九百八十七萬三千四百十四圓、輸入一億七千三百七十七萬三千八百六十一圓、同三年に於ては、輸出二千六百四萬八千三百三十七圓、輸入一億六千三十二萬四千四百六十圓、同四年に於て、輸出四千二百二十萬二千四百六十圓、輸入一億四千七百五十八萬五千三百十圓、而して同五年に至りては、實に輸出七千六百十一



萬七千四百五十四圓、輸入一億七千九百四十六萬四千五百九十三圓に達し、開戦後本邦輸出額の増進洵に顯著なるものあるを認むるに足るべし。我對印貿易は、本邦産業の發達、日印交通機關の整備に伴ひ、上記の如く長足の進歩を來したるが、其由來する所を釋ぬるときは、管に此等の事情のみに止まらず、或は印度に駐在せる本邦領事館員の斡旋盡力、或は該地に出張又は定住せる本邦官民の調査報告等、亦與て多大の力あること勿論にして、此等各般の事由は、相俟て我對印貿易の急速なる進歩を促したること固より云ふを俟ざるなり、蓋し英領印度は、支那、南洋、濠洲等と共に、本邦工業に對する原料供給地たると同時に、本邦產品の一大華客にして、殊に歐洲戰亂開始以來、當該方面に對する我商權は著しく伸張せられたるを以て、戦後能く之を支持し、尙進んで此等地方を我貿易圏内に收むること極めて切要にして、是應て我邦の世界的發達を遂ぐる第一歩たるに外ならざるなり。故松倉乾二君は、夙に我海外貿易の振興を計るを以て自己の任とし、殊に深く日印貿易の必要を感じ、農商務省實業練習生として遠く印度に赴き、彼地

日印貿易發達の  
一原因

經濟事情に關する秩序的調査を進め、又地理風俗人情等に關する社會的研究を試み、以て世界の一大寶庫を開き、該地に對する我邦貿易上の地歩を確立せんことを努め、孜孜として執掌しつゝありしに、不幸二豎の侵す所と爲り、中道にして夭折せらる、是管に君に於て恨事たりし耳ならず、君が遺愛の家族、君が知友たる吾曹に在りても、亦遺憾措く能はざる所にして、將來に於ける日印通商の發達上、損失洵に鮮からざるものあり。然れども、近時時局の影響に由り、我對印輸出貿易は、未曾有の活況を呈し、我商業地域著しく擴大せられたるを看れば、君亦以て瞑するに足るものあらん、吾曹不敏と雖も、今日まで該方面に獲得したる本邦貿易の地歩を維持し、尙益發達せしめ、以て君が宿志に承順せんことを期するものなり。

# 日印貿易の發展について

法科大學教授 河津暹君

印度は天下の寶庫

印度は天下の寶庫である。自然富源の豐饒なる殆んど無限であるといつて宜しい。自然が勞力資本に比して、生産要素として最も重要であつた古代に於て、印度が文明の中心をなしてゐたのも之が爲である。自然が生産要素として古代の如く重要でなくなつても、尙同國が經濟上重要な位置を喪はないのも亦之が爲である。歐洲と印度との交通貿易が數千年に亘つて世界商業の最も重要な部分をなしてゐたのも實に之が爲である。同じ亞細亞に國を成してゐる我國の如きは、印度については大に注目してゐなければならぬのであるが、我國史は割合に兩國間の交通に關する事蹟に乏しい。古昔のことは暫く措くも明治維新後廣く世界と交通をなすに至つたにも拘らず、印度貿易は近年に至るまでは世の注意を惹かなかつた

戦前に於ける日印貿易

ことは寧ろ怪まざるを得ない、北守南進論が夙に識者の間に唱へられたけれども、このとは單に口舌の事に止つて、實行が之に伴はなかつたのである。今日日印貿易を論ずるものが、動もすれば恰も我等の祖先が天竺國を議しかのに髣髴たる如きものがあるのは、實に怪しまざるを得ない次第である。然し乍ら我國と印度との貿易は近年に至つて實に長足の進歩をなしたのである、試みに我貿易表を採つて戦前に於ける日印貿易額を調べて見ると

	大正二年	大正三年	大正四年
輸出	二九百萬圓	二六百萬圓	四二百萬圓
輸入	一四七	一六〇	一七三

の數額を得るのである、其の貿易品の内容について少しく吟味すると、我國への輸入が輸出に比較して著しく超過してゐるのは、工業原料特に實綿及繰綿(大正四年の統計では一億三千九百萬圓)が輸入せらるゝが爲である、この勢は今後益々進むことになるのであらう。然るに我國から輸出するものは尙未だ雜貨貿易の域を脱せざるものか、たとひその域を脱したにした

雜貨貿易の域  
を脱せる我輸  
出品

所で尙未だ遠く出でないものである。一體雜貨貿易といふものがあるべきものではない、貿易品の數量が少くあるか、乃至は未だ安定的販路を得るに至らないが爲に専門的に一種の貨物の貿易に従ふことが出来ないから夥多の種類のもを雜然と取扱ふからして起つた名稱に過ぎない。雜貨貿易の域を脱したものの、中には大正四年の統計に由つて見ると燐寸(五百萬圓)羽二重平織(四百萬圓)肌衣(二百九十萬圓)紡績絹糸(百九十萬圓)精糖(百六十萬圓)等が其の重なるものである。印度より工業原料を輸入することが益々多くなり、又多くしなければならぬとすると、我國は又印度への輸出貿易を益々發達せしめなければならぬと信ずる。同國への輸出貿易は近年長足の進歩をしたといつた所で、其れは實に微々たるもので、自分は、大正元年末に同國に少しの間遊んだことがあるが、當時を以て今日を律することは出来まいが、當時自分の見聞した所では、同國市場に於ては我國貨物の販路は未だ開拓に着手しないといつても差支がない程であつた。其のことは甚だ遺憾ではあるが、一面から見れば開拓の餘地が大にあることを示す

開拓の餘地甚  
だ大なり

日印貿易振興  
上の注意事項

第一には消費  
状態の熟知を  
要す

のであるから、適當な方法順序で之れが開拓に従事したならば、相當の成績を擧ぐることは容易であると信じたのである。このとは今日に於ても尙決して誤でないと思つてゐる。日印貿易は是非共大に興さなければならぬ。日印貿易が大に興つて我國の爲に裨益することが多大となつたならば、其の尊い犠牲者であつた松倉君や、其他同じ運命に坐した同志の靈を慰めることが出来る道理である。

日印貿易を振興するに當つて十分に研究し、其の研究の結果相當の實行手段を講じなければならぬことは多々ありと信ずるのであるが、其中自分が特に世の注意を喚起したいと思ふのは次の諸項目である。其項目とても格別耳新しいものを含んでゐる譯ではない、遼東の豕であるが、而も之を繰返すことが尙無用でないと思つてゐるから、簡單ながらこゝに之を述説するのである。

第一は、同國の消費状態を十分に知ることである。このことは今更いふを待たず、輸出貿易をするものには必要なことではあるが、特に印度の如き國

について必要があるのである。我國では印度といへば唯暑い國としか思はないが、其の暑いにも程度があるのみでなく、南部と北部とは自然の風物から人事百般に至るまで悉く異つてゐるのである。故に同國市場に販路を開拓せんとするには、特に十分の研究を必要と信ずる。松倉氏が印度事情を著はされたのも、畢竟は世人に印度の状態は千種萬態であつて、我々が歐洲諸國などを觀て考えてゐるのは、全然趣を異にしてゐることを明にしようと思はれたからである。これが爲には、出来る丈の新しい材料を集めたり、事情の許す限り旅行をして、其の階梯になることを努められたやうである。天假すに歳を以てしたならば立派のものを作り上ることが出来たであらうが、今公にせらるゝもの丈でも相當に参考となるであらうと信ずる。之は松倉氏の著書について自分の思ふ所を陳べたに過ぎないが、實地に貿易をしようとするものは、豫め十分な研究をしてからでないといふ、印度の如き地方によつて事情を異にしてゐる所については失敗するかも知れないのである。

## 第二には仲立人の利用

第二には「コンブラドル」を利用することである。印度では「パーシー」と稱する種屬があつて、之れが經濟社會には絶大な勢力を有してゐる、所でこの種屬が「コンブラドル」即ち仲立人をしてゐるので、孟買あたりでは日本の天神様みたいな冠をつけて奔走をしてゐるのを直に見ることが出来る。英國の「ブローカー」と同じで、之に頼めば適當な問屋なり其他を周旋して呉れるのである。其の組織が整つてゐるのであるから、この機關をよく利用して貿易を行へば、案外容易に其の目的を達することが出来るが、これらの機關を利用せずして直接に販路を擴張しようとしても、勞多くして功少いといふ事である、自分は印度の事情については知ることが少いが、歐洲諸國の商業界の状態もさうであるから、印度について友人等の自分に教えて呉れた所も大體に於ては正しいものであらうと信じてゐる。このことが誤なしとすれば、我國商人等が同國市場に於て販路を擴張して行くに當つては、此の機關を利用信任しないのは間違であるといふ。これらの仲立人は一寸外から想像するが如き不信用のものでは決してない、不信用のことをす

之を利用せざるは大なる間違

れば依頼するものがなくなつて結局立脚地を失ふことになるから、そんなことはあるべきものではないのであるから、「コンブラドル」を信用してかゝらず、自分で直接に得意を作らうとしても、少くとも同國に於て相當の位置を得、信用を得ない間はまづ困難であるといつて差支ない。この點は初めて同國に貿易關係を作らうとせらるゝ方々の注意を煩したい所なのである。但し「コンブラドル」といつた所で、所謂ピンからキリまであるので、其中でも財産もあり顔も賣れてゐるものでなければ、立派な得意等を知らぬから、依頼者の希望するやうな取引關係を作つて呉れることは事實出來難い、であるから、これ等の機關を利用するに當つては、これ等のものゝ財産信用其他一切の事柄を研究した上、當方で希望する如きものを得るとに努めらるゝが宜い、若し其を得られたなら我手先の如くに利用することに注意しなければならぬ。

## 第三には長期信用の覺悟

第三、同國に販路を擴張するに當つては、矢張可成長期の信用で貨物を買る覺悟をしなければならぬ。自分がこゝに説明するまでもなく、長期の信用

## 金融機關の後援

で貨物を買うものと然らざるものがあつたとすると、貨物を買ふものか  
らいへば長期の信用で賣つて呉れるのを喜ぶのは當然であるから、今日外  
國貿易では信用の長短といふことが、販路を擴張する上に於て最も重大な  
關係を有するのである、甚だ危険でないかといへば、實際危険であるのであ  
るが、この危険を冒すに非れば到底其の競争者を破つて得意關係を開いて  
行くことが出來ないのである。故に我國商人等が同國に於て販路を擴張  
するに當つては、其のことに注意しなければならぬ。所で、普通の商人等では、  
事實上そう長期の信用を巨額に授けることが出來難いのであるから、是非  
共相當の金融機關が、之れが後援をして呉れねば、其の目的を達することが  
出來ないのである。銀行は進んで、危険ある事柄には、一切關係をしては  
ならぬといふのは古い思想なので、たとひ危険ある事柄でも、其の事柄にし  
て望が多いものであるなら、之に關係しても必ずしも不可といふのではな  
い、唯かくの如き危険を冒す以上は相當に之を防ぐ丈の準備は之を行はね  
ばならぬ。かゝる點からいへば、我國では此種の機關を缺如してゐるので

同國市場等に於て販路を擴張せんとするものにとりて、如何程不利益であるかは想像に餘あるのである。故に此點については特に世の金融機關の經營者に注意せられんことを希望せざるを得ない。

第四には商業  
道徳に注意を  
要す

第四、最後に世人の常にいふことではあるが、同國に販路を擴張するに當つては、商業道徳に注意しなければならぬといふことである。我國商人が商業道徳に注意しない、其結果折角開拓し得た販路も、他から奪はるゝに至ることは、數々耳にする所であるが、就中文化の低い國に對しては特に其の弊があるようである。粗製濫造の如きも其の一である、我國では文明の程度も低く、生活の程度も亦従つて低いのであるから、之に精巧にして高價な貨物を輸出した所で、需要するものはないであらう、粗製であらうが濫造であらうが價格さへ廉いならば之を需要するものがあらうとは、營業者の口より聽くことがある。これ等の國に輸出する貨物が、益々粗濫に製造せらるゝ傾向がありといはれるのは、根底に於てこの考があるからであらう、必ずしも原料の價格が騰貴した爲でもあるまい、勞働者の賃金が高くなつた爲

粗製濫造を慎  
しむべし

でもなからう。然し乍らこの根本思想が根底に於て誤りであるから、其根本思想を破壊する必要があると信ずる。如何に生活の程度が低いからといつて、粗製濫造品で殆んど實用に適せぬものを喜ぶ道理がない、其の廉いのを喜ぶといふのは實用向で、裝飾等を加へないものを選ぶといふに過ぎない、其れを誤解して廉いのがよいといつて、粗製濫造品を輸出すれば、價格の低廉であるといふ點は忘れて、獨り粗製濫造の非難のみが残り、折角開拓しかけた販路も、之を失はねばならぬことになるのである。粗製濫造が我輸出貿易上の一大障害をなすことは著しい事柄である、獨り粗製濫造だけでは、同業者が互に惡聲を放つたり、商業の秘密に屬すべきことを洩らしたり、約束に背いたり、其他商業道徳の眼より見て許す可らざることを特に文明の程度の低い國の市場に於て繰返して行ふものであるから、彼國の人で我國商人と取引をしようとするものがあつても、未恐ろしくして敢て之をなさうとするものがない、多少價格が高くとも、其の販賣條件等に於て劣つてゐても、信用することが出来るものと取引をするように至るの

である。我國商人はこの點について三省する必要がありと信ずる。これ等の新しい市場で試賣を行ふことも一利一害である。其の試賣をなすに、平常の價格等で之を行ふのなら差支がないが、廣告代りに頗る廉價で試賣を行つたとすると、其の價格の低廉なるが爲に相當に販賣額があつたとすれば、其のことは洵に結構に相違ないが、其の市場では其の價格を以て故らに低廉にしてあるものとは思はないで普通のものであると思はしめる結果を生ずる。勿論其のことは誤解であるには相違ないが、かゝる結果を生ずることも一概に不合理であるともいひ兼ねる。所で、其後普通の價格で賣出すと暴利を食ふものとして折角開けかゝつた販路も、再び之を失はねばならぬことゝなる、試賣の制度の如きは印度の如き市場に施すことは考へ物といはなければならぬ。要するに新市場を開拓するには、最も商業道德に注意しなければならぬので、商業道德上缺けた所がないにもせよ、上に陳べた試賣制度に於て見るが如く、苟も商業道德を疑はしむるような行爲は努めて之を避けなければならぬと信ずる。

試賣制度は考へもの

以上は日印貿易を振作する上に於て最初に心懸けねばならぬことであつて極めて平凡なものであるが、平凡でも眞理である以上は之を棄てることは出来ぬ。若し夫れ日印貿易に従事するものが益々多くなつて、而かも従來行つて來たような不確實な基礎の上ではなく、牢乎たる基礎の上に着々として其地歩を進めて行く、青年が顯はれたなら、松倉君の靈はこゝに慰むることが出来るのであらう、而してこの拙い論文が多少なりともヒントを提供することが出来たなら、稿者は松倉君の遺志を成さしむる上に、涓滴の資をなし得たものとして大に喜ばざるを得ぬのである。

終

男 爵 澁澤榮 一閣下題字

曹洞宗管長 入道沙門 日置默仙禪師題詩

帝國教育會長 文學博士 澤柳政太郎先生序文

皇子傳育官長 三好愛吉先生序文

立教大學總理 ライフスナイダー先生序文

法學博士 花岡敏夫先生編著

日印貿易

之犠牲者

# 青年松倉乾二

洋裝總クローズ  
四六判約三百五頁  
定價金壹圓五拾錢  
送費金拾錢

青年身を挺して遠く蠻煙瘴雨の地に入り、功を海外に立て、邦家の隆盛を計らむとす、不幸中途僅かに一篇の『最近印度經濟事情』の著を遺して殞ると雖も、其壯志は永く後世に傳ふべきものあり。殊に況ひや、その計畫するところ詳密にして、然も平素自から行ふところは之を苟もせず、その觀察の犀利、着眼の機敏なること青年松倉の如きをや。



本書は編を分つもの三、上篇には故松倉青年の人物性行を叙し、中篇には印度の貿易、人情風俗、言語、宗教、政治等の各方面に亘れる故人の觀察を輯め、下篇には當代名士の故人に關する追憶批評並に記念論文を録す、若し「最近印度經濟事情」を以て實なりとせば「青年松倉乾二」は即ち華なり、前者は精確周密なる系統的調査に成れりと雖も、その卓抜奇警なる觀察と輕妙流麗なる詞藻とは寧ろ後者に於て之を見る可し、以て青年立志の模範とす可く、以て印度研究の資料とす可く、亦以て國體宣傳の模範とす可きなり、著者花岡博士の特に意を用ゆるもの、豈に深く故なからむや、敢て大方の一書を呈む。

發賣所

株式會社 東

京堂

東京市神田區表神保町三番地

振替口座東京二七〇番  
電話本局 二二三三 二三三八

大正七年九月十日印刷  
大正七年九月廿一日發行

最近印度經濟事情

定價金貳圓

編輯兼  
發行人

花岡敏夫

東京市日本橋區綱設町二丁目一番地

印刷人

佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地



發賣所

株式會社 東

京堂

東京市神田區表神保町三番地

振替口座東京二七〇番

本書は編を分つもの三、上篇には故松倉青年の人物性行を叙し、中篇には印度の貿易、人情風俗、言語、宗教、政治等の各方面に亘れる故人の觀察を輯め、下篇には當代名士の故人に關する追懷批評並に記念論文を録す、若し『最近印度經濟事情』を以て實なりとせば『青年松倉乾二』は即ち華なり、前者は精確周密なる系統的調査に成れりと雖も、その卓抜奇警なる觀察と輕妙流麗なる詞藻とは寧ろ後者に於て之を見る可し、以て青年立志の模範とす可く、以て印度研究の資料とす可く、亦以て異國文學の指導とす可きなり、著者花岡博士の特に意を用ゆるもの、豈に深く故なからむや、敢て大方の一讀を望む。

### 發賣所

株式會社 東京堂  
東京市神田區表神保町三番地

振替口座東京二七〇番  
電話本局 二二九三 二五三八

大正七年九月十日印刷  
大正七年九月廿一日發行

最近印度經濟事情

定價金貳圓

編輯兼發行人 花岡敏夫  
東京市日本橋區堀込町二丁目一番地

印刷人 佐久間衡治  
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 英舍  
東京市京橋區西紺屋町廿七番地



### 發賣所

株式會社 東京堂  
東京市神田區表神保町三番地

振替口座東京二七〇番

辯護士 法學博士 花岡敏夫先生著

えすととへるの法理を判決既判力

近 刊

菊判洋装全一冊定價金貳圓内地送料拾貳錢  
英國法に存する「えすととへる」(禁反言)の原則を詳論細  
説し訴訟法上の重要問題たる判決の既判力に論及せられ  
たるものなり。内外の學說判例を引證し、幾多の難問疑  
義を氷釋せられたるの好著にして、執法家の爲めに、又  
立法者の爲めに見逃すべからざる良參考書たり

發行所

東京市神田區仲榮町

嚴松堂書店

(振替東京六五五六)

辯護士 法學博士 花岡敏夫先生著

# 英國新會社法論

菊判脊革全一冊定價金參圓 內地送料金拾六錢

## 好評再版

商事法に造詣深き花岡先生の著にして、近世立法例中特色を有する英國の新會社法規を解説し、併せて我邦現行の會社法規を比較論評せられたる大著なり。英國會社法規の研究者の爲めに絶好の指針たるは勿論、我會社法の解釋運用上に最も有力なる一資料として好評噴々たり

發行所

東京市神田區仲樂町

巖松堂書店

(振替東京六五五六)

366  
111

終